様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月８日現在

機関番号：17401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2008　～　2011
課題番号：20520647
研究課題名（和文）　**海の論理からみたイングランド中世史(10 世紀から 13 世紀)の再検討**
研究課題名（英文）　The medieval history of England revised from a point of view of the sea
研究代表者
鶴島　博和（TSURUSHIMA HIROKAZU）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：20188642

研究成果の概要（和文）：島国であるにも関わらずイングランド中世史は，漁業，海運，海軍といった海を生活の場とする海民という視点が十分とはいえない。それには二つの理由がある。一つは現代における沿岸漁業の極端な衰退と国民レベルでの漁食文化の衰退であり。もう一つは，10世紀から13世紀の史料が，主として課税あるいは紛争解決をめぐる性格をもつが故に，魚があまり史料上に現れないという理由にある。後者は，当時のイングランドで魚食が行われていなかったのでのではなく，逆に魚が生存を支える基本的食料であったが故に，課税の対象にならなかったからと考えられる。その一つの傍証となるのが、新しく14世紀以降には一般的に出現してくる会計録にたくさんの魚が記録されていることである。言わば陸の視点からイングランド史はこれまで記述されてきたわけある。しかし，当時のイングランドの社会が海と切り離されて成立できるはずもなく，海の視点あるいは論理からいま一度中世イングランド史を検討し直す必要がある。
　本研究は，(1) 環境と技術の柱(2) 社会の柱，(3) 権利関係の柱，(4)市場と交易の柱，という四つの柱を設定して，中世イングランドの各地域の生業総体の把握を通して，新しいイングランド史理解を提示した。

研究成果の概要（英文）：Although England is a part of the Isle of Britain, surrounded by sea, there are relative lack of researches into fishery, maritime trade and traffic, and naval force; that is, lack of those into activities of sea-men. There seems to me two reasons of this missing research link.　The one is that at the present day British people face the cultural decay of ichthyophagy.　The other problem is that historical evidence form tenth- to thirteenth was mainly concerned with taxation and settlement of disputes in a wide sense. The latter never shows that at that time fish had not been eaten, but they did a lot and various fish in their daily life.　This means that fish could have been subsistence consumption to support ordinary people including the poorest people. This is the reason why fish exclusive of particular fish, such as herring, salmon and eel, dropped off the list of taxation.　In the fourteenth century house hold-accounts we can see many and various names of fish.　It may be safe to say that the history of England has been written from a point of view of land.　However, the medieval English people could not survive without relationship with sea.　Therefore, we need reconsider the medieval history through ‘fish eyes’.
　As the result of this research I show a new understanding of the medieval English History from four academic points of view: such as (1) environment characterization an technology, (2) social relationship, (3) various relations of rights, and (4) markets and trades.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：イングランド・中世・環境・社会史・海・生業・海民

１．研究開始当初の背景

(1) イングランドはブリテン諸島にあり，海に囲まれているにも関わらず，漁業をはじめとする海に関する仕事を生業とする研究は，とくに中世史に関しては，文献史学の側からのものはきわめてすくなかった。そしてこの方面はもっぱら考古学者が指導的に研究を進めてきたのである。その最大の原因は史料がすくないというマテリアルの問題とともに、イングランドから一般的な意味での魚食の習慣が衰退しつつあって、人々の意識に海で生業をたてる人への認識が薄れてきたことにある。

(2) 漁業に関する残存する史料の大半は 14 世紀以降の会計録等にあり，それ以前は主として課税に関する叙述が大半である。これはどういうことなのか，というのが最初の疑問であった。考古学の残存資料からは中世全般を通して魚が大量に食されており，10 世紀から 13 世紀の研究対象の時期に漁業が存在しなかったわけではない。

(3) 研究対象時期の史料は，陸の視点から作成されている。たとえば，この時期の最も重要な史料である Domesday Book は住民を主として，villager（村民），boarders（零細土地保有者），cottars（小屋住み者），servus（奴隷）という，農業的観点から分類していて，漁業などを生業とするものは最初から念頭に置かれていないふしがある。そのため，漁民に関する記述は想像以上に少ないのである。ケント州は三方を海に囲まれ，鰊漁で有名な土地であったが，この史料ではまったく漁民がでてこない。

(4)史料の性格も，課税関係のものが多く，Domesday Book もそうした性格をもっている。従って課税対象外の魚は記録に残らないことになる。ブリテン島の牡蠣はローマ時代から有名な産物であったが，研究対象時期には，報告者は見いだした 11 世紀初頭の一例（カンタベリー大司教座教会附属修道院の手話に関する手引き書）をのぞくと一切でてこない。これは，報告者が研究の過程で論証したように，牡蠣が現在と違って，安価で貧者の貴重なタンパク源であったという状況がある。課税という点からは魚は特定魚種を除くと史料に残らない。それは住民の生活を支える生活消費物資だったからにほかならない。

(5) 盛んであったはずの漁業とその史料上での記載欠如という矛盾故に，ながらく漁業を中心とした海民集団の研究も歴史家の視野に入ってこなかった。こうした視野を海の論理と名付けた。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は，海の論理から 10 世紀から 13 世紀までの（ただし，史料上の制約から 16 世紀までは視野に入れなくてはならない）イングランド近海域および内水系における漁業を中心とした，海および河に関する生業（漁業，運搬，交易，軍事等）の総体的把握を通して，イングランド中世史の再検討を行なうものである。

(2) 内水までを対象としたのは，実際問題として区分が難しいからである。

３．研究の方法

10世紀から13世紀までのイングラド周辺海域（英仏海峡，北海，アイリッシュ海）および内水系における「水」にかかわる生業の総体的把握のために，以下の四つの視点から再検討を行なう。

(1) 環境と技術の柱。生態系や，海岸線の地理的条件および変化などの環境変化。造船，航海，漁撈にかかわる技術の水準とその発展過程の解明。

(2) 社会の柱。海民と水軍を中心とした人間

集団にかかわる共同体的関係と領主制的支配関係の解明。

(3) 権利関係の柱。地先権等の海水面に対する「陸」の権利を解明する。

(4) 市場と交易の柱。漁獲物に対する領主制的権利関係と，流通の市場メカニズムを解明すること。

この四つの視点から，イングランドの各地域の生業の総体の把握をめざした。地域のおかれている環境によって生業社会の構造は異なるために。研究は地域単位でおこなった。分類は、東南部、西部、北部である。

４．研究成果

(1) 環境と技術の柱。

①11 世紀を中心とする海岸線の再構成を部分的に行い，地図を作成した。これらの地図は，下記の発表論文でも使用している。

② イングランド東海岸で主として組織的に行われた鰊漁は，長期的な気候の温暖化も寄与しているが，なによりも浮網の開発と鰊漁によって結ばれた海民集団の出現（後述）による。西海岸の鮭漁とウナギ漁は梁を用い体の個別の荘園単位での活動が主となっていて東部とのコントラストをなしている。この研究の過程で、梁と漁具に関しての一定の知見を得ることができた。まテムズ河口域から東部のブラックワオーター，西のセヴァーン河口域の梁の構造に関して，現地でのフィールドワークも経て一定の知見をえた。現在 GPS と Google Earth を併用しての当該時期と思われる梁の遺構が発見されつつある。しかし、現時点では、これらのデータを十分に利用する段階にはない。

③ 魚種の確定。中世のイングランド人はどのような魚を食べていたのか、という問題はきわめて重要な課題である。これを解明すべく，14 世紀以降の会計録に現れる魚名（ラテン語）をピックアップしてデータ・ベースを作成した。確認できた魚種は約 150 種類になる。次にラテン語名を現代英語に置き換える作業が残っている。当初，辞書によって自動的に英語に置き換えていたが，この作業はきわめて不確定である。それで，考古学の魚骨の発掘資料を併存させて作業にあたっているが、資料が数はあるものの、分散的で作業は難航し，現在もその途中にある。できるだけ早く比較対照を明らかにして，データベースを完成し公開する予定である。

(2) 社会の柱。

①鰊漁を核とする海民集団の再構成。

サッセクスの Pevensey， Hastings，ケントの Romney，Dover，Sandwich の鰊漁の漁師集団が，当時最大の貴族でサセックスに拠点をもち海民集団の長であったゴドウィン家のもとにその庇護民として強力な船団を構成したおは、11 世紀になってのことである。また，ノルマンディでもフェカンの修道院長は，イングランドのサッセクスにある Rye に所領を保有し，これまた鰊漁師の船団を自らの配下においていたのである。11 世紀に発展した鰊漁は，その漁法から船団を組む必要があり，海軍の行動にとって最適であった。環海峡の鰊漁師は，「鰊の暦」を共有し，イングランド人やフランス人というネイションに拘泥されることなく，複雑な支配関係を構築していったのである。彼らの船団がノルマ征服になくてはならないものである以上，征服をたんにネイションの観点から議論することはできないのである。

② シンクポート体制の成立

征服後，イングランド南部の Pevensey，Hastings，ケントの Romney，Dover，Sandwich を中心とする五つの漁港（シンクポート）は，海峡を挟んで北のイングランドと南のノルマンディを支配下におくイングランド国王が支配する「帝国」の各ドミニオンを結ぶ脈管の出入り口となった。そしてその漁民は王国海軍を担っていったのである。

(3) 権利関係の柱

現代人は，中世の荘園というと農業的生産単位という視点で考えて，陸地から構成されていると考えている。よくて内水面の池や川を水利権から考えている。しかし，本科研研究で明らかになったのは，海面所領の場合は，一定の海域が陸地に所属していたことである。難破船や漂流物はその海面領域を保有する領主や共同体の取得物に属していたのである。Sandwich では，満潮時に沖合の船から小さな斧を投げて届く範囲までが陸地に属していた。また，干潮時に腕を伸ばして竿が当たるまでの範囲の漂流物は，その海に面する荘園に属していた。「潮の干満に洗われる地崎の磯，藻場，浅瀬，干潟や水際，渚，浜などは陸と水面の接点として人間の開発領有行為が及びやすい身近な「水辺の世界」」（保立道久）であり，濃密な権利関係が設定された場であった。

(4) 市場と交易の柱

鰊漁の最良の漁場は，イングアンド島南部にあるイースト・アングリアのヤーマスの沖合で，その大市は 9 月 29 日に開催された。サセックスやケントの鰊漁の漁民はヤーマスの砂浜で網を干す権利を獲得し，近隣で盛んな塩生産と相まって活発な交易を行った。大消費地ロンドンには，安価な鰊が海路によ

って大量に輸送された。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① Hirokazu Tsurushima, 'Hic est Miles' some images of three knights, Turold, Wadard and Vital' in *The Bayeux Tapestry: New approaches, Proceedings of a Conference at the British Museum,* ed. by Michael Lewis, Gale R. Owen-Crocker and Dan Terkla, (Oxbow Books, Oxford and Oakville, 2011), 81-91. 査読あり
② 鶴島博和「母教会論序説－イングランドにおける初期教会史の視角：ラクルヴァー(Reculver)を事例として－」*The Haskins Society Journal Japan* Suppplement (1), Kumamoto 2011, 1-26. 査読無し
③ 鶴島博和「前近代のイギリス」木畑洋一・秋田茂編『近代イギリスの歴史』ミネルヴァ書房, 2011,3-24. 査読無し
④ 鶴島博和「ローマン・ブリテン～10 世紀」近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版, 2010,26-47. 査読無し
⑤ 鶴島博和「11 世紀～近世前夜」近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版, 2010, 46-79. 査読無し
⑥ Hirokazu Tsurushima, 'What do we mean by 'nations' in early medieval Britain?', in Hirokazu Tsurushima ed., *Nations in Medieval Britain,* (Donnington：Shaun-Tyas,2010). 1-18. 査読無し
⑦ Hirokazu Tsurushikma, 'The Origins of Local Society in late "Anglo-Saxon" England', *The Korean Journal of British History* (Yongkuk Yonku) Vol. 20, 2008, 349-370.査読あり
⑧ 鶴島博和「カーチュラリーの世界―保管と記録―」鶴島博和・春田直紀編『日英中世史料論』日本経済評論社, 2008, 313-333, 査読なし.
⑨ 鶴島博和「中世イングランドにおけるコロディの起源と変質」　坂本浩・鶴島博和・小野義彦編『ソシアビリティの諸相』南窓社, 2008.　118-134. 査読なし.

〔学会発表〕（計　４件）

① Hirokazu Tsurushima, 'Herrings and Powers in medieval England', 　第 2 回異文化交流国際学術会議, 2012.2.17. F 南栄技術学院, 台南市, 台湾
② Hirokazu Tsurushima, 'The Birth of British Empire, in the 20th Korean Society of British History, 2011.6.24. The Univeristy of Cheongju, 韓国.招待講演
③ Hirokazu Tsurushikma, 'The Origins of Local Society in late "Anglo-Saxon" England, in Third Japanese-Korean Conference of British History, 2008. 11. 13.全南大学校, 光州市, 韓国
④ Hirokazu Tsurushima, 'Hic est Miles' some images of three knights, Turold, Wadard and Vital' The Bayeux Tapestry Conference, 2008.7.15. 大英博物館, ロンドン, 連合王国

〔図書〕（計 11 件）

① Hirokazu Tsursuhima ed. *The Haskins Society Journal Japan* 4, 2011. 66pp.
② Hirokazu Tsursuhima ed. *The East Asian Journal of British Hisotry* 1, 2011, 84pp.
③ Hirokazu Tsurushima ed. *The Haskins Society Journal Japan Suppplement* (1), Kumamoto 2011,81pp.
④ ピーター・サルウェイ編, 鶴島博和日本語版監修, 南川高志監訳『ローマ帝国時代のブリテン島』オックスフォードブリテン諸島の歴史　１, 慶応大学出版会（2011）, 336pp+53pp
⑤ Hirokazu Tsurushima ed., *Nations in Medieval Britain* (Donnington: Shaun-Tyas, 2010), 148pp.
⑥ トーマス・チャールズ=エドワード編, 鶴島博和日本語版監修, 常見信代監訳『ポスト・ローマ』オックスフォードブリテン諸島の歴史　２, 慶応大学出版会（2010）, 378pp+69pp
⑦ パトリック・コリンソン編, 鶴島博和日本語版監修, 井内太郎監訳『１６世紀　１４８５年－１６０３年』オックスフォードブリテン諸島の歴史　６, 慶応大学出版会　（2010）, 364pp+69pp
⑧ ラルフ・グリフィス編, 鶴島博和日本語版監修, 北野かほる監訳『１４・１５世紀』オックスフォードブリテン諸島の歴史　５, 慶応大学出版会　（2009）, 450pp+102pp.
⑨ コリン・マシュー編, 鶴島博和日本語版監修, 君塚直隆監訳『１９世紀　1815 年－1901 年』オックスフォードブリテン諸島の歴史　５, 慶応大学出版会　(2009), 421pp+57pp
⑩ 鶴島博和・春田直紀編(2008)『日英中

世史料論』日本経済評論社，397pp.
⑪ 坂本浩・鶴島博和・小野義彦編(2008)『ソシアビリティの諸相』南窓社,145 pp.

〔その他〕
(1) ホームページ等 (計３件)
① 東アジアブリテン史学会 http://easbh.org/
② 奏文庫歴史研究所 http://kanadelibrary.org/
③ 中世ブリテン史研究会（ブログ） http://britishhistory.kanadelibrary.org/
(2) 全国学会のオーガナイズ（計１件）
「世界史教育の現状と課題」第 60 回日本西洋史学会，メインシンポジウ，2010.5.29. 別府大学，別府市

(3) 国際学会のオーガナジス（計１件）
Fourth Korean-Japanese Conference ofBritish History, 2011. 11.12-14. Kumamoto University

６．研究組織
(1)研究代表者
鶴島 博和（TSURUSHIMA HIROKAZU）
熊本大学・教育学部・教授
研究者番号：20188642